日本建築学会大会学術講演梗概集
（関東） 2011 年 8 月

重伝建地区を中心とする観光徒歩圏の実態把握と分析

歴史的町並み・佐原における回遊性向上に関する研究　その６

正会員　○村本健造*　同　木口　彩****
同　窪田亜矢**　同　安川　千歌子*
同　永瀬節治***　同　吉田　健一郎*

回遊性　観光徒歩圏　佐原
歴史的街並み　観光　行動モニタリング

1. 背景と目的

佐原の重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建）を中心とした観光客の徒歩行動について東京大学都市デザイン研究室で行った調査に関する報告[1]は、前稿で報告した。この調査では、佐原の重伝建に訪れた観光客の施設間の１トリップ行動を記録した結果、重伝建を始点とする観光客の徒歩行動は、忠敬橋を中心に香取街道と小野川沿いの街路に沿って東西南北に広がった「十字構造」であるが明らかとなった。本稿では観光客が佐原に着いてから帰るまでの一連の徒歩行動を調査し、佐原における観光徒歩圏の実態を明らかにすることを目的とする。

2.　調査概要

2.1 調査方法

本稿は「観光客モニター調査」に基づくものである。これは、観光客が対象地に着いてから帰るまでの行動をモニタリングし、行動経路や立ち寄った施設・滞在時間を調査したものである。モニタリング終了後に佐原観光の満足度や要望などについてアンケート調査を行った。

2.2 調査日程と調査数、モニターの属性と与条件

調査は 2010 年 12 月 18 日、2011 年１月 8 日（ともに 11 時～17 時）の合計２回行い、単独で行動し 12 人と二人一組で行動した 3 組の計 15 のモニターについて調査を行った。本稿のモニターは佐原を初めて訪れる、大学学部生及び大学院生を中心とする十分に徒歩能力のある 20 代の若者である。加えて以下の条件の下で調査を行った。

１）佐原の重伝建の十字構造の中心である忠敬橋をモニタリング開始点、町並み交流館を終了点とする。

２）モニターにはこちらから事前情報を与えず、観光のための情報はモニター自身によって得たもののみである。

３）モニターの移動手段は徒歩のみであり、佐原を一日 d での長い時間で観光することを前提としている。

2.3 調査結果の表現方法

すべてのモニターの行動経路を一つの地図上で表現している。各モニターの通った経路を同一モニター内での重複を含まずに計測し、それぞれの道の通過数を線の太さによって５等級で表している。

モニターの出入りした施設についてはすべてをプロットし、観光施設・名所、寺社、商店・飲食店等の３つに分類して表示している。観光施設・名所、寺社については名称も併記している。

3. 調査結果

3.1 広範囲にわたる観光行動

徒歩という制約条件にもかかわらず、東は香取神宮、西は諏訪神社、南は石尊山、北は利根川までの東西約 3000ｍ、南北約 2100ｍに及ぶ広範囲での観光行動が観察された。

3.2 １つの核と３つの周辺目的地

重伝建の中心である忠敬橋を調査開始地点とした為、すべてのモニターがまず重伝建近辺の歴史的町並みを観光している。その後、前述の広範囲にわたる観光行動に移行しているが、顕著な傾向として利根川、諏訪神社、香取神宮を目的地とする行動が多く、３つの目的地が観光徒歩圏のエッジとなっている。なお、全体の実に 93%が３つの目的地のうちいずれか１つ以上を観光している。

更に、立ち寄り施設が重伝建近辺に集中し、その他の立ち寄り施設の多くが３つの目的地周辺に集中することから、重伝建近辺を観光の核としながら、３つの周辺目的地のいずれかまたは複数の観光を観光の副次的な核とする観光徒歩圏の実態が明らかとなった。

3.3 時間の余剰による周辺地域への回遊

本調査におけるモニターの平均観光時間は約 4.4 時間（最長 5.5 時間、最短 3.0 時間）である。モニタリング終了後のアンケート（有効回答数 18 件）において、モニターのうち、約 72%が今回の滞在で「観光するのに十分な時間があった」もしくは「少し時間が余った」「大分時間が余った」と回答しており、観光時間の余剰が重伝建近辺以外への回遊を促したことがわかる。更に、「また佐原に来たいと思うか？」という項目では約 94%が「機会があれば来てみたい」「あまり来たいとは思わない」という回答であったことから、初訪問でも約４時間の滞在で「佐原を十分に観光した」と多くのモニターが感じたことがわかる。

3.4 観光マップによる周辺地域への周遊

モニターは事前情報を与えられなかったため、町並み交流館などで配布されている観光マップ（図３）やまちなかの観光地図などをもとに行動している。これらの観光マップには重伝建近辺が大きく表記されているほか、利根川、香取神宮、諏訪神社が重伝建近辺から比較的近接しているかのように描かれており、モニターの広範囲におよぶ観光行動に影響を及ぼしたことが推察される。

Measurements and Analysis of Tourists' Walking Distance around Preservation Districts for Groups of Historic Buildings : A Study for the Improvement of Visitors' Rambling Activities in Historic Area in Sawara (Part.6)

MURAMOTO Kenzo, KUBOTA Aya,　NAGASE Setuji
KIGUCHI Sai, YASUKAWA Chikako, YOSHIDA kenichiro

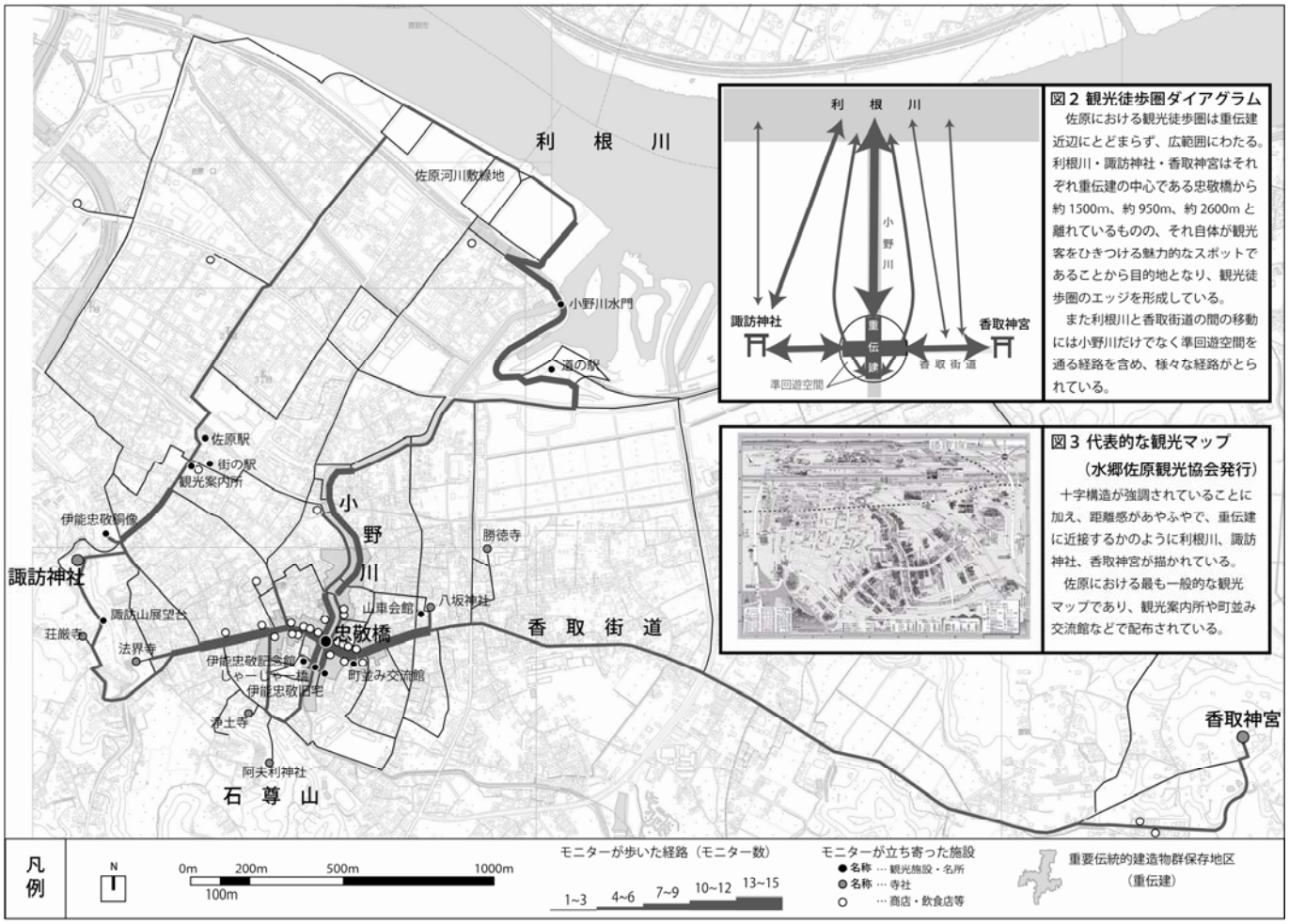

図１　モニター調査により明らかとなった観光徒歩圏の実態（ゼンリン電子住宅地図 香取市 2010 年版をもとに筆者作成）

4.まとめと考察

4.1 重伝建周辺での観光の限界と広範な観光徒歩圏

「佐原を観光して良かった場所はどこか？（複数回答有）」という項目では２位の利根川（28%）に大きく差をつけて小野川沿いの町並みが１位（72%）であったことから小野川沿いと香取街道を中心とする重伝建近辺がモニターにとって人気が高かったことが示されているが、「佐原の観光に対しての要望」という項目で最も多かった回答が「香取街道の整備を進めて歩きやすい道にしてほしい」、次点が「町並みの整備を進めて歴史的な町並みの魅力を高めてほしい」と重伝建に関する要望であったことから、重伝建近辺の観光満足度が決して高いとは言えない。

そのため、重伝建近辺の観光のみでは時間を持て余すこととなる個人での長時間滞在を前提とした佐原での観光行動は、余剰時間で、ある程度距離のある３つの周辺目的地のいずれかまたは複数に向かう二段階構造であり、東西 3000m、南北 2100m に及ぶ広範な観光徒歩圏を有していることが明らかとなった。

しかし、観光徒歩圏のエッジを形成し、佐原観光の副次的な核となる利根川、諏訪神社、香取街道のいずれの目的地に向かう場合にも、東西軸を香取街道、南北軸を小野川とする「十字構造」の延長線上での移動が多いことから、両軸の結節点にあたる重伝建近辺は佐原観光の核であるとともに、目的地間移動の拠点としても機能していると言え、広範な観光徒歩圏を意識した情報提供やルート整備などが求められる。

4.2 周辺を含めた回遊性向上のために

回遊性向上のためには魅力的な観光スポットの充実とサインによる誘導が有効であることをその４・その５で明らかにしたが、今回明らかとなった広範な観光徒歩圏を活かし、今後回遊性を更に向上させ、その効果を町全体に波及させるためには重伝建近辺にとどまらず、広域での回遊性向上を考えることが必要である。

[1] パンノイナッタポン、窪田亜矢ら（2010）「観光客の回遊性を促進する要素に関する分析　歴史的町並み・佐原における回遊性向上に関する研究　その１」日本建築学会学術講演梗概集 F-1（都市計画、建築社会システム）、2010 年度大会（北陸）、pp557-558

*東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻　修士課程
**東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻　准教授・工博
***東京大学先端科学技術研究センター　助教・工博
****東京大学大学院新領域創成科学研究科　修士課程

*Master Course, Dept of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo
**Associate Prof., Dept of Urban Eng., Faculty of Eng., Univ. of Tokyo, Dr. Eng.
***Assist. Prof., Research Center for Advanced Science and Technology, Univ. of Tokyo, Dr.Eng.
****Master Course, Graduate School of Frontier Sciences, Univ. of Tokyo